

先週私たちは、パウロとその一行が、アジアとビテニヤでみことばを語るのを聖霊によって禁じられたこと、しかし、トロアスで主からの幻を見ることで、マケドニヤ地方のピリピへと導かれたことを見ました。ピリピは、ローマの植民都市で、その地方第一の町でしたが、そこにはユダヤ人の会堂がなかったので、パウロたちは、川岸にある「祈り場」へと向かい、集まった女性たちにみことばを語りました。そこで最初に救われたのが、紫布の商人ルデヤで、彼女はその家族とともにバプテスマを受けます。そして、パウロたちを自分の家に招き入れるのです。今日もその続きを見ます。

そのルデヤの家から祈り場へと行く途中、パウロたちは、占いの霊につかれた若い女奴隷に出会います。最初パウロの方からは彼女に対して何もしないわけですが、でも彼女がパウロたちの後について来て、こう叫んだというのです。17節「この人たちは、いと高き神のしもべたちで、救いの道をあなたがたに宣べ伝えている人たちです」と、これを幾日も続けたので、困り果てたパウロは、彼女から悪霊を追い出します。

すると今度は、彼女を利用してお金儲けをしていた彼女の主人たちが、もうける手段がなくなったのに腹を立て、パウロとシラスを捕らえて、町の長官たち（判事、裁判官）の前に引き出して、こう言うのです。20-21節「この者たちはユダヤ人でありまして、私たちの町をかき乱し、21 ローマ人である私たちが、採用も実行もしてはならない風習を宣伝しております」。

この訴えに対し、長官たちはまともに取り調べもすることなく、また群衆もこれに反対して立ったので、パウロたちの着物をはいでむちで打たせ、彼らを牢屋に入れてしまうのです。何とも滅茶苦茶な話ですが、そんな不当な扱いを受けたパウロたちは？というところ、真夜中頃、彼らは牢の中で、神様に祈りつつ、賛美の歌を歌っていました。すると突然、大地震が起こり、獄舎の土台が揺れ動き、たちまちとびらが全部あいて、みな鎖も解けてしまうのです。そうなる困ってしまうのが、彼らの見張りをしていた看守です。地震当時、彼は眠っていましたが、目を覚まし、その状況を見て、囚人たちがすでに逃げてしまったと判断します。そして剣を抜いて自殺しようとするのです。囚人を逃がすことに、それほど大きな責任があったからです。

ところが、そこでパウロがこの看守を救います。28節「そこでパウロは大声で、『自害してはいけない。私たちはみなここにいる』と叫んだ」。その声を聞いて驚いた看守は、パウロとシラスの前に震えながらひれ伏します。そして、こう言うのです。30節「先生がた。救われるためには、何をしなければなりませんか」。ここで看守の意味した「救い」が何であったかはわかりません。でも、パウロたちはこう答えます。31節「主イエスを信じなさい。そうすれば、あなたもあなたの家族も救われます」と。

この後、パウロたちは、看守とその家の者全部に主のことばを語ります。そして信じた彼らは、みなバプテスマを受けるのです。実にあつという間の出来事ですが、彼らの救いが本物であったこと、つまり、それが主からのものであったことは、34節からわかります。「それから、ふたりをその家に案内して、食事のもてなしをし、全家族そろって神を信じたことを心から喜んだ」。そこには神様を信じることへの喜びがありました。

夜が明けると、長官たちは、自分たちの判断や行動が軽率であったことを悟ったのか、警吏たち（警察）を送って、パウロたちを釈放しようとしています。けれども、ここでパウロは自分とシラスがローマ市民であることを明らかにするのです。それを知った長官たちは恐れます。そして、自分たちで出向いて、パウロたちにわびを入れ、ピリピから去ってくれるように頼むのです。そのようにして牢を出たパウロとシラスは、ルデヤの家に行き、兄弟たちに会い、彼らを励ましてから次の町へと向かっていきます。

今私たちは今日の流れをさっと見たわけですが、やはりここで中心となる出来事は、看守とその家の者全部が救われたことだと思います。ただその救いは、パウロとシラスにしても、また看守とその家族にしても、だれも予測できない状況の中で起こりました。本来、救いの出来事というのは、そのようなものであるわけですが、私たちは、この看守とその家族の救いを通して、あらためてそのことを学びたいと思います。

まずその救いは、牢の中で起こったわけですが、パウロとシラスは、この看守を救うために、自ら進んで牢に入れられたのでしょうか？パウロが、占いの霊につかれた女奴隷に会った時、そんなこと考えもしなかったと思います。彼女から悪霊を追い出した後、パウロは、やっと落ち着いてみことばが語れると思ったかも知れません。ところが、何が何だかわからないうちに、彼らは犯罪人扱いされ、取り調べもないまま、むちで打たれ、牢にまで入れられてしまうのです。こんな気の毒な話はありません。

でも、それがあって、パウロたちは牢の中にいました。つまり、看守と接点をもったのです。では、パウロとシラスは、そこで看守にみことばを語りましたか？少なくとも、聖書にはそのようには記されていません。ということは、この時点でも、看守が救われる可能性は極めて低かったといえるでしょう。でも、そこで大地震が起こります。そして、牢のとびらが全部あいて、しかも囚人たちの鎖も解けてしまったわけですが、そのことが、看守を自殺するという所まで追い込みます。でも、そこで彼が自分の死を覚悟した時、救いの手が伸ばされ、ここから一気に彼は救いへと近づけられるのです。

すでに見たように、とびらが開き、鎖が解け、しかも真夜中という条件からすると、囚人たちはすでに逃げてしまってもおかしくありませんでした。でも、彼らはみなそこにいたのです。驚いた看守は、ペンテコステの日に、ペテロのメッセージを聞いて心刺された人々が、「私たちはどうしたらよいでしょう？」と尋ねたように、パウロとシラスに「先生がた。救われるためには、何をしなければなりませんか」と聞きます。そのようにして看守のうちに求めが起こされた時、パウロは、彼に主のことばを語る機会を得るのです。

皆さん、「救われるためには、何をしなければなりませんか」という求め、心の渇きは、どうしたら、人のうちに起こせますか？それは私たちにできることですか？人がそのような救いの求めをもつようになるのは、多くの場合、苦しみや試練といった経験を通してといえると思いますが、つまり、それは私たちが何か計算や計画をすることができることではないのです。ただ私たちにできること、それはその求めのある人に対して、主のことばを語ること、主イエスを証することです。そのためにいつも備えをしていなくてははいけません。

私がここで「備え」と言う時、それは単に、主イエスの救いについて言葉で説明できるようにしておくということではありません。主のことばを語る者自身が、主イエスを信じ、救われた者としての恵みによる歩みをしていることが大切です。皆さんは、牢の中でのパウロとシラスの祈りと賛美が、他の囚人たちや看守に見せるためのパフォーマンスだったと思いますか？

それは何よりも彼ら自身のため、つまり、彼ら自身がそのような逆境とも思えるような中でも主イエスを信じることで、彼らは主に祈り、賛美を通して主をほめたたえていたのです。それが、他の囚人たちへの生きた証となり、彼らはそれに聞き入るだけでなく、地震が起きた時も逃げることをしなかったと私は思います。そして、そのことがわかったので、看守はパウロたちを「先生がた」と呼び、彼自身もその本物の救いを求めたのではないのでしょうか。

神様は、私たちの考えや計画を遥かに超えたところで、救いのご計画を進めておられます。私たちには、その神様のなされることを一つ一つ知ることはできません。でも、そうであるからこそ、いつでも主に期待したらよいのです。パウロたちのように、悪霊につかれた女性に対して良いことをしてあげても、それがきっかけで、不当な扱いを受け、自分が苦しみを味わうようなことも、この罪の世では起こります。そして、そのような時に、不平不満をもって、その状況を嘆くことは誰にでもできることです。

でも、そこでその嘆きや苦しみを主に向けるなら、それは祈りになります。賛美の歌を通して主に向かって歌うなら、主はその心に聖霊による励ましを与えて下さるのです。そして、それが私たちのうちで、神様を知らない人々との違いとなり、証となります。主は、良い日だけでなく、逆境の日にも、いつでもご自分を信じ、みことばと祈り、また賛美を通してご自分に近づく人を、家族や他者の救いのために用いられるのです。

「主イエスを信じなさい。そうすれば、あなたもあなたの家族も救われます」。このことばは、この看守にとっては、その場で現実のものとなりました。でも、どうでしょう？そのように家族がみな同時に救われたという人はどのくらいいますか？私の家族もまだ救われていません。ある人は、何十年もかかって、家族が救われ

るということを経験されたりします。また、家族が明確な救いにあずかることなく、亡くなられたという方もおられるでしょう。そのあたりは、私にはわかりません。私の祖母も、去る4月に信仰を言い表すことなく、召されました。その祖母の世話をしていたおばさんも、私から聖書を受けとるのを拒否しました。

求めのない人、心に渇きが起こっていない人に、無理矢理、主のことばを語ることは逆効果です。でも、その人が、自ら進んで求めているからといって、その人に福音が必要ではない、ということではありません。すべての人が福音を、主イエスを必要としているからです。いつその求めが起きるかはわかりません。でも、それがいつであっても、主のことばを語れるよう、主イエスを証できるよう、私たちは自分自身がいつでも主イエスを信じていることが必要です。

いかがでしょうか？今日、あなたは主イエスを信じていますか？その主への信仰は、日曜日以外にも、いつでもあなたのうちで生きて働いているものですか？その主への信仰のゆえに、信仰をもたない人とあなたとの間に、何か違いは生まれていますか？主イエスが神の救い主であることは、悪霊でも知っていることです。ですから、それを知っているというだけでは、悪霊と何ら変わりはありません。でも、主イエスを信じ、この方のみことばに聴き従うことで、主の愛の中に留まるなら、私たちのうちには、主の喜びが満ち溢れるのです。

主イエスを信じることは喜びです。それは主が、私たちをご自分の喜びとして下さっているからです。主は、罪人のあなたのために十字架にかかって死んで下さるほどに、あなたを愛して下さっています。あなたが「主を信じます」と告白した後も、その心において自己中心で、神様以外のものを神とてあがめることが多々あるような中でも、主はそれをすべてご存知で、あなたを愛し続けて下さっているのです。それは、他でもない、あなたをご自分の愛と赦しの中で、主を愛する者、主に似た者へと造り変えられていくためです。私たちは、この新しい年も、このすばらしい主を信じ、主が私たちの愛する者、また福音を必要とするすべての人を救いに導いて下さるよう、祈り求めていこうではありませんか。